

デイサービスセンターにおける 利用者行動と空間的課題

——一施設における予備的考察——

高 阪 謙 次 ・ 岩 佐 和 代

A Study on the Behavior of Users and the Subject for Architectural Space
of Day Service Center

—A Preliminary Investigation at a Institution—

Kenji KOHSAKA and Kazuyo IWASA

1. 目 的

デイサービスセンター（以下「DSC」と略す）は、在宅の高齢者が昼間、通所して介護を受ける施設である。現在はその多くが、特別養護老人ホームなどの既設の福祉施設に併設されている。

DSC 設置の目的は、在宅高齢者本人の昼間の生活を充実することと、同居家族を高齢者の世話から一時的に解放するリリーフ効果の、2つにあるとされている。後者に関しては、効果が確かめられている。しかし前者については、確かめられていない。

本研究の目的は、その DSC が高齢者の日常生活における楽しみな場所となり、たとえその心身機能が弱っても、彼・彼女らの自己実現に繋がるようなものになる必要があるという立場から、利用者の行動と空間の関係を考察することにある。本稿の目的は、その予備的考察として、TaDSC において行った調査から得られた知見をまとめることにある。

2. 方 法

TaDSC は、愛知県 N 町にある特別養護老人ホーム Ta に併設された DSC である。平成 3 年（1991 年）に開設された。介護保険制度発足前の類型は A 型（重介護型）であった。平成 12 年（2000 年）12 月時点での利用登録者は 116 人で、介護度は岩佐・高阪「デイサービス利用者の着装と衣生活実態」（本号別論文）表 2 のように各段階に散らばっている。利用者のこうした多様性は、本研究の目的からいって、適切な対象施設であったと言える。また TaDSC は、利用者の行動の自由を比較的容認する処遇をしているので、それが反映された行動の観察ができるということも、メリットであった。利用者はほとんどが N 町住民で、本施設から 5 km 以内に居住している。

表1 利用登録者数とスタッフ数

単位：人

	月	火	水	木	金	土	日
登 録 者 数	37	38	44	35	40	37	28
スタッフ数	10	10	10	6～7	10	6～7	6～7

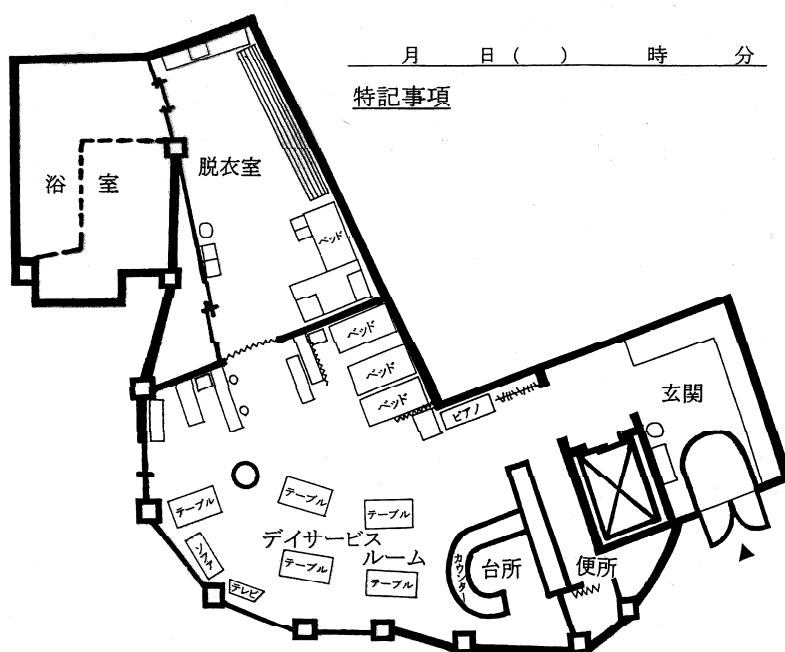


図1 観察シート

曜日毎の利用登録者数は、調査時点で表1のようになっている。週間の累計が259人であるから、平均週2.2回、3日に1度、利用していることになる。実際の利用者は、1日平均28人（平成12年9月時点）ということであった。登録者の4分の1ほどは、体調不良等により利用を休んでいることになる。

このTaDSCにおいて、利用者一人ひとりの15分ごとの場所と行為を、個々人の利用開始から終了までを1日（午前10時頃～午後4時頃）、観察シート（図1）に記録した。2000年10月の4日間で77人（男23人、女54人）のデータを得た。同一人については、1日限りを記録した。この間の利用者の全員について記録が得られた。この77人に関しては、要介護度、性別のデータを、施設側から提供を受けた。年齢データも提供を受けたが、本研究の内容からしてあまり意味がないから、分析対象としては割愛した。

こうして得た観察調査の結果を、さまざまな行動パターンに類型化するとともに、要介護度や性別などによって、特徴を分析した。

3. 結果と考察

施設内の空間は、つくり方や利用状況から、入浴・脱衣ゾーンを除いて、大まかに4つのゾーンに分けてとらえる事ができる(図2)。

「集合ゾーン」はテーブルが4つ置かれ、利用者の多くがここを利用することを想定しているゾーンである。食事、娯楽、行事などがこで行われる。

「独立ゾーン」は、おそらくは施設側はもともとこうしたゾーンを想定していなかったであろうと思われる場所である。利用者のうちの幾人かが、集合ゾーンから離れた所を好み、ここをたまたまその場所にしてしまったという自然発生的なゾーンであろう。

「交流ゾーン」はパントリーのカウンターであり、介護スタッフが配膳やお茶を淹れたりする時に、利用者と交流が生まれることを想定したと思われる場所である。

「休息ゾーン」はベッドが3つ置かれている。入浴後などに横になりたい利用者のためのゾーンである。

以上の4つのゾーン別に利用者行動と空間の関係を分析する。

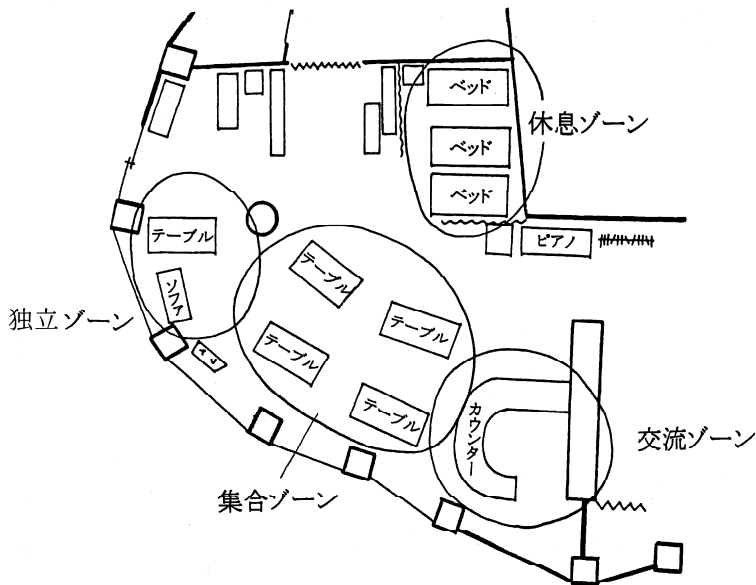


図2 空間分類

3.1 集合ゾーン

入浴時を除いた多くの時間をここで過ごした人は64人で、多数を占めている。その人たちの行動パターンは、3つに分けられる。ほとんどの時間ぼんやりと同じ席に座り、時には浅く眠ったりの「呆然」型、新聞を読んだり、隣にある喫茶室に行ったりと、気の向くままに活動している「活動」型、他の人と話をしたり行事に参加したりの「交流」型、の3つである。後者になるほど要介護度が低い(図3)。「活動」型が一定数見られるのは、このTaDSCの介護方針が、利用者の自由な行動を許容しようというものであることにも

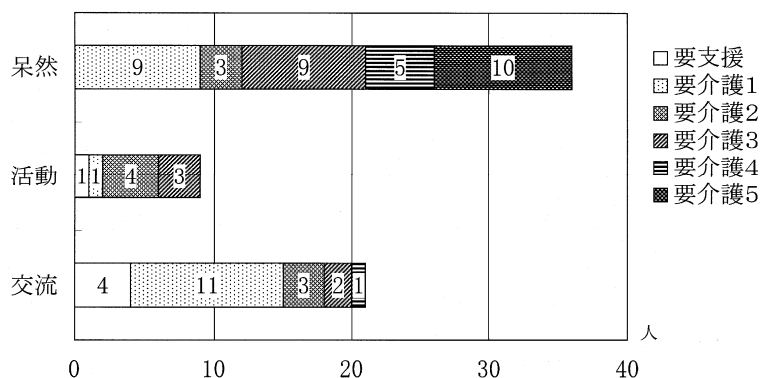


図3 集合ゾーンにおける過ごし方

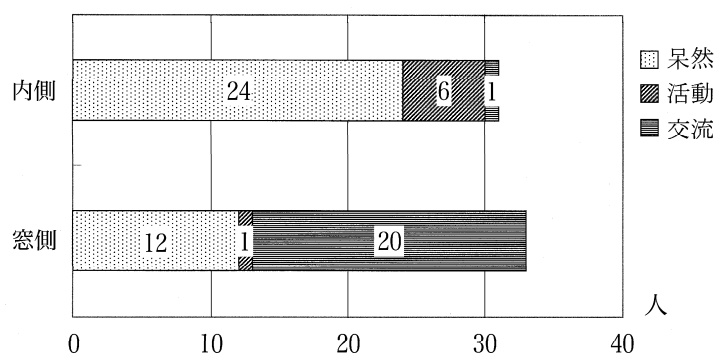


図4 場所別における過ごし方

依っている。

要介護度が低いのに「呆然」型が多いのは、痴呆症の特徴を示していると思われる。痴呆症の進行の度合いと、手がかかる度合いを示す要介護度とは必ずしも比例しない。男性7人、女性29人と、男性が比較的少なかった。こうしたタイプの男性は、DSCを利用しない(家族が利用させない)からであろう。社会的に活躍することの多かった高齢男性が「呆然」となってしまった姿を、世間に晒したくないという家族の思いが反映しているように思われる。「活動」型は、男性6人、女性1人で、男性利用者に多く見られる型である。「呆然」男性はDSCに出さず、「活動」男性はDSCに出すという傾向を示している。「交流」型の21人は、すべて女性であったことが大きな特徴である。

以上の3つの行動パターンには、着席にひとつの傾向が見られた。4つのテーブルのうち、内側の2つに「呆然」型と「活動」型、窓側の2つに「交流」型が固まるのである(図4)。このことは、この集合ゾーンは更に、利用者が呆然と過ごすことのできるゾーンと、他の利用者との交流を望む高齢者が利用するゾーン、の2つに分けて計画するほうが望ましいことを示している。さらに言えば「活動」型のゾーンも、次に述べる独立ゾーンと合わせて、独自のものとして計画することが求められよう。

3.2 独立ゾーン

調査をした4日間で、ここを主として利用したのは18人であった。自分の定位置があるようで、ここで新聞、テレビ、趣味などで、マイペースで過ごしていた人が11人、呆然としていたり、うとうと眠っている人が7人であった（図5）。

前者の11人は、要介護度1の人が4人、2が5人と、比較的要介護度が低く、自立的な人が多い。終日ここを利用した人は6人、一時的な人が5人であった。終日の人は、ほぼ一日中ここで絵を描く人もいるなど、「自適」型と言える過ごし方をしていた。一時的な利用人も、新聞、テレビ、会話などにより、有効にこの空間を利用している人が多かった。

後者の7人は、要介護度5の人が4人であり、比較的介護度が高い高齢者が多い。またこの内、終日ここを利用した人は4人で、一人になれる場所を求めてここに落ち着いたと思われる。残りの3人は、集合ゾーンに座る場所がたまたま無いために、この空いている席を利用した人のようである。

このゾーンをほぼ終日利用していた10人は、他のゾーンの利用者との交流はほとんど無い。この10人中9人が男性であった。集合ゾーンにおいては女性が多いのとは対照的である。

DSCの多くは、一人で過ごせるこうした場所、「自適」を求める人のための空間、そして男女別ということを想定していない。重要な場所であり、充実する必要がある。

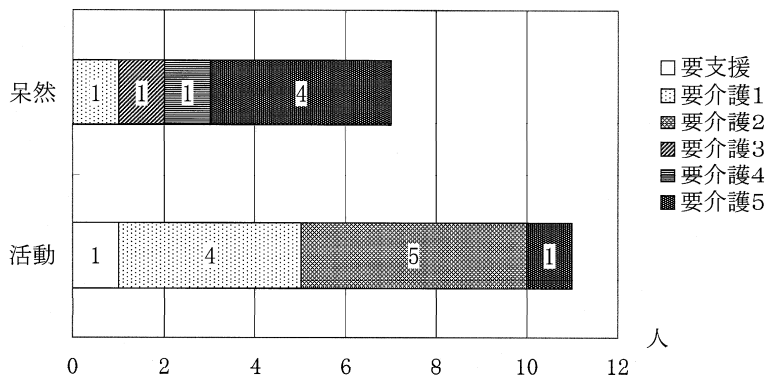


図5 独立ゾーンにおける過ごし方

3.3 交流ゾーン

台所カウンターの所で、施設スタッフとの交流もできる場所である。終日ここを利用したのは1人であり、この場所の交流的イメージを活かしていると言えるのは、この人と台所の手伝いをした人の、2人だけであった。

一時的に利用したのは12人であった。集合ゾーンが空いてない場合とか、集合ゾーンでの食事が長引いた利用者が、そこをリクリエーションに使うので、ここへ移動させられたとかの、スベア空間、予備的な場所としての利用が多かった。

利用者のここでの行動は、図6のように、「呆然」「食事」「交流」「徘徊」（途中での立ち寄り）「手伝い」であった。要介護度が高い人に利用が目立つ。

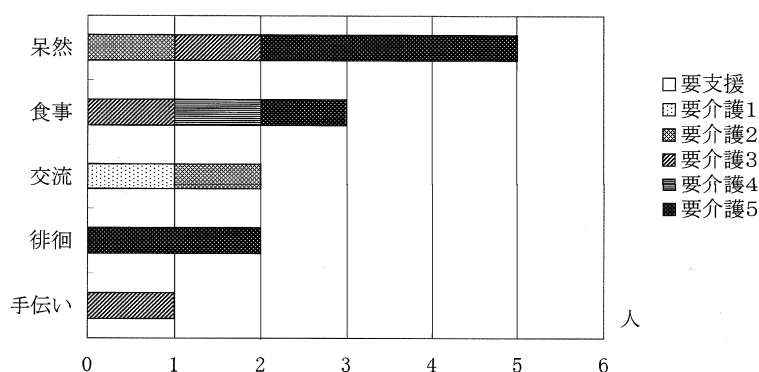


図6 交流ゾーンにおける過ごし方

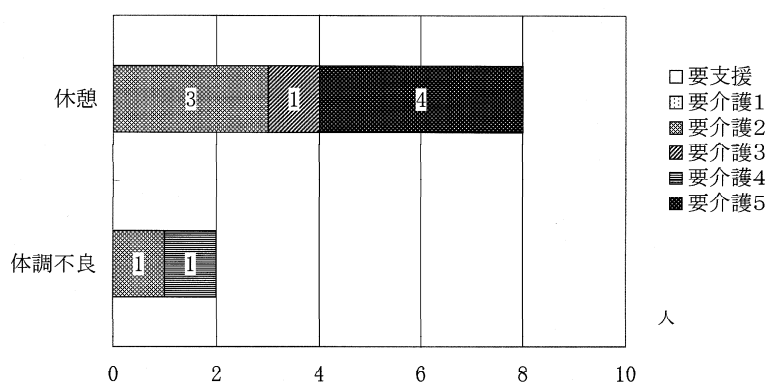


図7 休息ゾーン一時的利用者の分類

3.4 休息ゾーン

終日利用は2人、一時的利用は10人であった。前者は2人とも、要介護度4で痴呆症状がある。また徘徊行動が見られ、スタッフによる見守りが必要である。朝 DSC に来るとすぐにベッドに向かい、徘徊する以外は、一日中横になっていた。本人、スタッフともにここを定位置としているようである。

一時的利用は、図7のように体調不良と休憩による利用であった。後者は、入浴後や食事後で、1時間以内の利用が多かった。特にベッドでなくても、畳の部屋でも良い利用者であった。落ち着きや、なじみやすい空間、あるいは転用性ということを考えると、畳の部屋も用意することが有効であると思われた。

4. おわりに

本調査においては、TaDSCの利用者とその家族、同施設のスタッフの皆様とりわけ松井徹氏に大変お世話になりました。厚くお礼を申し上げます。また本調査のデータ収集は、梶村仁美君（当時生活環境学科4年生）の奮闘に多くを負っています。記して感謝申し上げます。

げます。

なお本論文は、平成11～12年度科学研究費補助金〔基盤研究(C)(2)〕を受けて行われた研究成果の一部である。

文 献

- 1) 高阪謙次・岩佐和代, 特別養護老人ホームにおける生活様式に関する研究——ノーマライゼーションの視点から——, 椋山女学園大学研究論集第30号「自然科学篇」(1999)
- 2) 高阪謙次・岩佐和代, 特別養護老人ホームにおける衣生活様式に関する研究——「生活の場」の視点から——, 平成11～12年度科学研究費補助金〔基盤研究(C)(2)〕研究成果報告書(2001)

高阪(生活科学部 生活環境学科)

岩佐(生活科学部 生活環境学科)